

本草大化集

下

中華書局影印

|           |             |             |
|-----------|-------------|-------------|
| 冊一<br>歌部  | 二           | 第<br>之<br>部 |
| 一部        | 二<br>三<br>四 | 四<br>之<br>部 |
| 滋賀縣立膳所中學校 | 冊           | 號           |



中華書局影印



李花集



立春

まろとよみうるよの霞  
をむかふすくせん  
すまうくゆく  
久くはれの岩アモ霞  
立春

立春

まろとよみうるよの霞  
をむかふすくせん  
すまうくゆく  
久くはれの岩アモ霞  
立春

早見山

軍事湖

印はよゆつて風をあとす。波音ひまがふうり  
白きれく演行——中立山

立波と虎とくさりのさやかす清蒸野菜  
うきりてうきと霞を霞うりいつの人のまへあらん  
佐保原の霞けむぢたまふまやうるん  
・ 署中小ちく白きれく演行——立里の山  
いそれをかきかきとくもんくまおよまくまほひう

修業山演行——

者れうちの霞の神と立つてあじふあくとくのと  
立ちを

ひづきとくわくとく舞葉の日れひとよあひねのとくも  
霞うちふれ木のりれ立風ようくねくせりふねくを  
時ちくね源の立風ようくしてくで行く  
黒ひつぐる

あづきの茶法螺あくまにあくまやまくらふくらん

中流准后通寄りあくまやまくらふくらん

りきよくすくすくと演行——

やうやくやあ、あらまあおほきくねえ  
おもひつて、とまゆをとるうとあり  
へども小ちよ

あらひけかると、おもひつけまふあぬ神がま

萬々くはく

うきむやるて、おもひきまくまれふるも  
ええぞきめのりよまづひへはく

あくすふ

うきわに所のまゝるも、おもひきまわす  
同じよまわ

やうの古の古事記ふる事記するはうせ

山高比萬くよ

うきひとの舍れ古事記うきみたる事記するん

中虎准石萬れゆくゆくをもばく

てのうかくあくともすま

那代の事記人、おもひきもうかくよ

ふくくこすくはく

萬々よもゆきまな壁で、おもひきわす年

谷すよまれことを、高きをゆすといへひよし

旧京萬々

とおれどもまことに谷のむらをうり  
二千余石のまと部の領をもつてす  
歎はるゝ事もと聞く

かく一城主とあらわしもとあらわしのむらを  
御見とす。まつは、まつはとおもひて、  
うそ／＼おとこめくいふて、おとこめくいふて、  
興國五年津、木太山、原、山の折、上野守  
侍へたるをめぐる山里北垣田所に  
うそ／＼おとこめくいふて、おとこめくいふて、  
あるきむて、足跡と音思ひあつて、

かく北垣と、木太山の景行と、まつはとおもひて、  
まつはとおひすりせし木太山の木の下、聲あづき音  
子の音の音す小萬

まつはとおひすりの音が、うと林立すやく  
うて、木太山の木と音せしとほもとくさん  
色あづきが、もと根をあられうづきとの書梅、もと根を

子日と

五代をねて、うすすす、枝ねど、うすひづくす

希葉と

まつはとおひづくす、木太山の希葉摘なり

寫れよひの聲の物語れどもくわね  
いづの事より此後ものと耳にしんばる事の餘り通  
きつてまがたま年餘りを暮まつしてはるうを  
ゆふより、事とて今ぬ生目鷺小跡をひくとがく見  
すま可半よ鹿

たら波か鹿の（みゆかるかの）を、  
みよしやねうがくの春（はる）がまくまくをせらぬ

圓鹿

蓮を抱存よとて既至鹿や、つとがまの實（じつ）を

品鹿

鶴浦川七郎は源（みなも）とくにかくさうかく萬（まつ）のわあくと  
傳（つた）ひの如（お）く岸（きし）からかくせくすうかおまく

海邊鹿

いさくと若（わ）いとがくすうかくせくのつま  
延（えん）元四年夏（なつ）まは井（い）年（とし）は一鹿  
名（めい）はくがくと潤（じゅん）て橋本（はしもと）の繁（しづ）は  
あくまくとえ渡（わた）る

西白鹿

夕霧（ゆき）がまこととととととととととととととと  
けりくのうめのうくとととととととととととととととと

主樹屋といひるいはくよゆう

ある砂の邊に梅を植えたりすふあへしと  
住處のまゝにて歎嘆はへと盡と

かきめくつて故のさひと見ゆ下酒代様をすらと  
そのふやまくみへは、こなれおとひじまのうれ  
そひの海やかのうきすりとねらひあらうれはは

さうもよせはと感ひと

梅の花のありとがやてのぬうやう聞うま  
満う育れあしとふうよひと人よもやううよん  
石を秋々く當くうはまへば、梅と

ふ里を聞うたりれまとも梅のありはやす年  
梅風と

里とふさけりとて梅と風ひいろよきす。此  
思ひく住む一里小花盛うりへと  
梅のむこうてふかひのうとあまくめがれと向く

あはれ梅とぞうふく  
おぞとゆりや夢すひうのうれ神とあはて

し。独住竹一里小梅は夢よまめゆきと

色とあとちくとすくと梅を事よりぬあや一枝と  
いはとよへてやつて梅のまことにやまとす

わやややうとたゞとゆふ人のゆく所

花と一枚おひてほんすみて

梅あはすうらぬ神とまうりうら銀とまくら金

黒梅と

ほんのすうがうん梅れ花さうきをまくらの黒うらを  
駿月夜は月のえよ源政あくしのうらの  
梅ふのりふえうり梅へいとあくしと  
えくらうれえはすもようすまくらを

休作

あそくといひうりと梅のまけ歌とまくらの月

休作

うつ 横作 梅のうくく候まくら  
うすまくらうくくの梅うくく月、歌まくらや

かまくらゆくら

青柳れえうりれまゆとくらうくくうくく地のうくら

喜作

かみくらゆくらうくくうくくうくくうくくうくく

寅作

あひひのううのうううううううううううう

興國とくせうううううううううううう

右裡有峰起家

朝唐應山

王潛山

信州著

中國名子洋

庸梅南朝起家

日

興國二年辛巳死

朝

唐應山

右

裡有峰起家

中

國名子洋

同は羈中百景とく演説

之の居て一ちば毒れぬるをも然へて思ひ難き

人を奇よまをゆく事小ゆと

いよいよて事半らうふ歎めどに居れまのがひら

百景奇演て少ゆあはれ

ゆと

之の居れども其してあすよまのゆく事や

西漢が演説

其のゆくりとててつて居て演のゆく事や

興國二年御落居ててあります

ゆく事、歸居とて

其をすすめのせよふねくゆくつて

様のまゆま月のつりゆくの経て事あす

ふゑくゆくふゆく奇よむ

ゆく事

まゆくわゆくゆく事のまゆく事のゆく事

いよや男のゆく事ゆく事ゆく事

ゆく事とて

これもあふまづか後の、うす年、うすかじとゆく事

百景奇演説

一四三

まよめりふるの室を拂ひまほの月をうつ新月りつとす

まの月

花のみよりさひしてまれば月もひれすひへり  
羈牛百萬とてよしはへす

高きふすじゆのや歌をゑまほのまれば月みちかは  
歌支ゆへはま月とて

神のうへよかすりつ月をれりかの里の歌を歌ひぬ  
牛尾准尼達てをゆへすかふいよも  
すてもすじ月夜の光の歌をすり  
そりへそよすらへ

みづ絶ひ草してもかども月されむ先へよきよきひ  
春の奇達ゆへすよ詫花

詩との事へなく、ふきくはゆいよきよき  
橋本まへるりの生物といつまくつきあへ年

よきとやあさりぬ花は青しまことうまはら  
ふれきはまられ半面とくわいしとうやま風かやく  
さく風なふ風とまきの立田ゆくひまはるあら

附山待花とよとよしゆ

さく風なふ風とまきの立田ゆくひまはるあら

花盡小春節を行へば近ても遠くもあつた

人の手筋

まうへ波とよしゆうゆき根みじかみ

因法寺たまうへ見ゆ

もああとさすれをすむかは本末を

花のうせすふ

久されちくひまわらふすめのうす

よしゆうへとまと申

かはりくわくがわく

小聲のま

ちふるは聲のまつまえ物語のまつまづか

人よ奇よ風を仰へてお参見

まうめうひよる風をうなぎよお風の扇ひ白いと

きぬふまきうけ風ひすがお風の風

ははお風扇すく風

せりひへう

候まうめうひよる風をうなぎよお風の風

経流すくよしゆうへとお奇せす

育て身にまといゆるやまけのまく風

東路よほへは都れ風車ひよく

まくいへてやまくまくひよく風

故れのり後

盛年ノソシ

山うへ花はせむれひとやかひうとまく風

行ふるもくれする旅とくらむ

候無となくととちぬきてのけがる山城の風

喜むと頬ほくろにうきよゆす

とかれづるを頬ほくろにせざるの心

社詠美

東北のれとまよ叶の風うてあし

采石

余れふくまゆの中、桂うておよびとまくや

秋

もり、桂竹す葉とめくらむく

あや、さくまよみて緋甘柿

ひまふねうとくとくとくの名うや花のうん

羈中白とよむか

おとく花とくはとくとくとくとくとくとく

おとく花とくはとくとくとくとくとくとくとく

花少よりく向くとくとくとくとくとくとくとく

信濃小豆の野すくとくとくとくとくとくとく

いぬねあか

夏のまよ立ぬる風と通す言叶つる花もか

花見小路ひらへ（さかみこうじ）  
うきうじふく（うきうじふく）

（演が）

ああ人のあそでわが一えいはらうわがまわづの  
花のうきうじふくわうきしゆ  
うきうじふくわうきしゆ風をまわすまわす  
男と女とくわうきや風よりかなみよねうきん  
うきうじふくわうきしゆ風をまわすまわす  
花見小路ひらへ（さかみこうじ）  
（演が）

延光四年の秋や秋葉くわうひてひづ  
まつりめぐるのうそ今後とも此の  
よき事玉手にせられいふやうやう思  
ひのゆにをめりけよみて月をも  
月の小袖生れは爲まつてくわう風  
ほり小袖ふくとくやうな爲まつて  
か此柄ハシモシモサトモソロシキ。ふ  
花見小路ひらへ（さかみこうじ）  
人をもみのぬくゆううおとせんとせんと  
とせんとせんとせんとせんとせんとせん

ううううううううたみじら橋やくまねにてまがまを  
玉の花おうとうりうとうとままで通て  
ううううとふちがもあうくてまはよ

絶好也

りきりうううえんまかわもすよ我やわらうううの夕  
比の町も物うてうううあきの花差し  
うあがゆもむきよそまうけうすて  
まうみのあせ経えようてもも花木の陰やううひ  
扇の葉ふきれよよとくわきよひて  
風の枝うへぬあは人のよまれゆく

たうあよゑゆい葉とむれらし極と多暗のうれなれ  
中流淮原うづうとくとがーうのゆよ  
こをゆやま井井うゑやせうめうめ  
やうううううううううううう  
うううううううううううううう  
又むくりうてうううううううう  
ううううとゆうんあもーふ  
うううううううううううう  
ううううひなうれうれうれうれうれうれ

はううう事なとゆうつけゆくはるゆく

候を喜びやうへぬは極うと身のまじめうせ  
人ようすをばらすとひへすも實に難と  
あまかたはれふうえまとくわくうきくは花のりほ  
花きつと同へまう色あとあがむ  
而ひねあらぬひらへくをまほのと  
いゆせば

白あやひも思ひぬまのきとうとまうてまほ達  
中流難處う狹くを狭くをせばす  
うやの風情の橋、それなよ音ふつまを  
かうんともくとまふまくいへある

春をあらうたるの階のさうめじへまほうまほ  
又いとくわのいとくわのいとくわのいとくわの  
北風ぬせかくもくくとま  
ひくいむのいとくわのいとくわのいとくわの  
ひくいむのいとくわのいとくわのいとくわの  
まほくもくのまをまほくもくううひ  
まほくもくのまをまほくもくううひ

た本すては後をうてうく者せのまくうさん

あくやしをとほりうじをとほすのまへさう

まかせりよもひぬかふうさんくはる

のほ道もとく神總家くわくま事

もゆくとまかうくされふや二月十四

新宿駅門邊に年いつとくとおは

まかく房も皆様く感事て跡ふも

さりとて、燈籠の 沢元な人者なり

乃きもふやうつへくまくとくとく

まく圓くわくとくとくとくとくとく

のまに色あらわくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あむひとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

馬鹿のまへくとほみくとほのまへくとほ

はせのうひもあよたまて思ひあれむ  
あゆきれりてつとくがくわや  
彦んとあがく男ひつけらし筆をも  
りきそ思ひ達せの半ふかくとてあらじ  
あめせ今いわひ歌かくとくと西  
人を酒屋あつて極ひう花を惜ひて  
ほりくわ

おじうくしきくせのまうとくをとくを  
なみのゆき山里小鳩ひて人のまく

七十五

心ふきうれむとて醉ふきよはれ門をすする  
中流難處より云瀧て水をすすむ  
まく候ぬ相うどくまくぬく候るやう

いづねり思とてうすいにむくとくをすむ  
因新小まごく洞もくとく脚もくちく  
おとめえの花よなむて黒ひくそくうく  
毛もくそくうく

四四

うへと行思ひし事へとつづくのさりと  
宿むべゆゆよ

吹きまことにすまふ花といふゆきをめぐら  
ゆどつしくみの風の音ふりかへる年  
梅丸まよひす年よりくじめくとす年  
いつのまに春日のえりよ梅まくとやうり風と吹くぬ  
花れあはれよまうりても因数のうらの徑  
あゆく思ひつけらとて

うふ候本と萬せひと思ひやまもゆいねうす  
相撲美よ元の夏あらう人のえでうるる

一 おもひの後よまくへ  
うふまくも相撲人みよがくやうるる  
未ちか唐たのひと

津らぬせうりあひとひ風ふらひの聲や吹けへな  
まよすうのふれおほにまわゆく日がす  
おもひたくぬあじ鳴きうた川されとすめく風  
風と吹く花柳とすく移ひゆく  
つるまくじまくよむるへ

うれやうへふさくおのとおとてう  
育てて、はせにせせてもうじく  
なとくへ備えゆゆくにまくとむ  
魚をあてまがせにまくわんじく  
今まもうとうせなりけりのちゆく年  
久くまざりまくまくまくまくまく  
てまづらき、庭園のむとむくまくまく  
我高きまくまくまくまくまくまくまく  
永日もまくまくまくまくまくまくまく  
くまくまくまくまくまくまくまくまく  
ね下駄ぬといふよあくわくよ

おがるふ人の歎きをうかへゆ  
ふ人やああよつてつまむよどむよみ初の歎を  
ね下駄ぬといふよ

摘要

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

中院准庭演く不覺や一奇才小眞

前代ものひよへ人のふれ渴せうと  
生へそも

まつゝ通ひ代ますすと前代もとふへそりあり

歎多を

かうの井のゆはりてのまほりとまくをもつて

藤を

候てこそねへな経みをれすよ思ひまゐるもむを  
打みてくまくまじき者の方は候後主とくに那

高志がくくえり

うりゆくはうのりあくまをなまれまう那

やもひれを、ゆきりたるもの、りすくまくを  
れまくわく、おもくへうたうくは演仰  
いはとてまともとてまともとてもあらわのりゆくゆ  
蜀中百事中よ番ま

ものゆと古葉よるをはくはまといひうすをあまし  
傷二月薬といひうすとくまをやがふ  
二月の心ひだよつて、うぬいよくまかげりす

あうか世よあらまはうよくわまよまのる

種のうふとくよます、おもくまよまく

おじもひとくよます、おもくまよまく

夏  
行

西涼秋之終一中少新樹

まわけ一跡よあかりばか一きく橋を志かすまほまか  
卯死仰月とよりと

うのあれもま八月の朝もすすまやまの雲る所すん  
中院准原よりすみせゆすまもす  
あとをよ一雨くさるがくさと  
とよねり人らを詠よかれてく  
養のひきだりとすくとすまもあま  
くつりと

せんじく御まつりのいかへとまゐのふもうから  
くるみみのまの神山のやううううありひとまきりなり  
佐喜<sup>前</sup>たの森の中よ小林の一村まほくえ  
えあふ。

今更よおきをうら拂つまわきやくは無事なれ

瞿麥臺と

あまびるをまくまくの麻麦よ爲せ金りの御うとう

待郭<sup>前</sup>

よひれ雲破よ雲をうふよのとさうら野にとく  
山里小道<sup>前</sup>はす祝をあく

かくてまぶしと西の城と郭と併とまよのまひ物よせを  
思ひともゆく人へよやかなとまてがくいも  
らひく書つてかうくへと飛と平<sup>前</sup>  
のれむをうとく

あまよなうくつと雲平れをふのとまよへうと飛とが  
侍まひるくと夢かまよのふせぬへうと

男ひつとまよううと郭とまよすへ夢もひうへま

まれ高雲と高子祝をうとまわく

今まよううとまわくと見ひとまわく

らへ

鷺よりきかへる部へねとまほそひのりかく  
部へ

う思ひぬあつよの部へくらのくらめたりと  
おとこすむまゆるやうと生じるを  
おう想ひふとあやとぞく  
ゆうきのまよ抄ふとしより、手せせん  
延元二年夏の日信房が一郎と云ひのがよ  
信房はゆくとくとくとくとくとくとくとくとく  
ゆふといひうる部へまほまほくまくまく

羈中一百三十行へ部へ

うよなれをわくよひてくもむの鷺ね  
子祝お遍へいふ

一章をうちよるくめのまよひくの  
中流准底奇うむとゆへよへての  
少しおのぞ見思ひあますくもあく  
育へそよふとゆへ

部へまほまほくまくまくまくまくまく  
ゆうきのまよ抄ふとくもむの鷺ねあ一ぬ神あがく

信濃より下向  
伊豫へ部と廻

そくらとさりとさす  
夏秋晴れしるる秋とて

一月の候、予事事にまよひてはまつたが、ま、  
独とせり、ふままで部とて

一月をかづうふと部とわざわざつゝと、  
雨中めちと

時もむだにじるりやまくのまよひのひ、而

杜子觀を

ゆめうきまえは社のひくをなまくす時もじぬ

曉部と

松山へ、いふと部と想ひて取られ、度差  
部とあがくちとちとも御うり経えのまうあくと  
うふひんらする部と達のわたりて、ひつともと  
あくとふ、山室へけりよもくわ  
津なまくとくとんとくとくとくとくとくとくと  
なまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
おとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

ゆめうきまえは部と想ひて取られ、度差

五月雨の比奈の入内すすみすすむ  
山たましの雲井、郭をもとまわ人ふせう

月前すらとてゆ

そやのすすとけや郭をもとまわ人ふせう  
みゆめにて色け雲るよりれぬ月比新月

中尾准原をはく奇のすすとまわ人ふせう  
かくしゆるすすとまわ人ふせう

とととととととととととととととととととととと

ととととととととととととととととととととととと  
延元二年五月内裏をはく比新のき

とととととととととととととととととととととととと  
つうくさうへまくらへよゆくまく  
いとくさくやへ宣政門院のひあすこ  
おけあまくらへよゆくまく  
よゆく五月の雲もいとくさくまくらへ  
くまくらへよゆくまくらへよゆくまく  
くまくらへよゆくまくらへよゆくまく

高古声のまくらへよゆくまくらへよゆくまく

くまくらへよゆくまくらへよゆくまく

郭々を

のよしはるをや五月のす祝う立まれの花代さうりや  
けく手ありくとふをもく潤ひてゆまな壁是  
りよく待ひてとうきんす祝うぬ里もうくとく  
風もも橋のやくまとすくいもよむじつねの  
風もも橋のやくまとすくいもよむじつねの

山家するといふを

世の中は便ひひめとす祝うりんとみをよあよう  
ゆよふ里は便ひくはとす祝うりんと  
ゆよふ里は便ひくはとす祝うりんと  
ゆよふ里は便ひくはとす祝うりんと

中尾准直をはくすあらんとまく

あらそや郭もくわくねよあくらも

くすく

かよよもたくひがりくめもとすくまもゆ

高瀬を

ひやめけとる人の歌よ夢ちをとまくとくん  
いふかまくはくすくじりくよおだれ色

かくよみ月音人のりとくつまくあ

うふくめくほひくじのあらせすりよす

延元四年五月五日吉野新詩院

いま准宿す。かく笑ひやれぬとて  
りうてまつたのじせふよほじあつる  
わねとあらむひと仰ぐ御身。

ゆふほとくそひあら萬蒲まゑうくちよとせ  
清きよだまく。梅と萬蒲のゆう因れ

空うり仰ぐ。せぬくら有りや  
羈中万葉す。萬蒲を

あやめひくあよひもとやうひやる都共まはづく成く年

橋を

橋乃木と高きあとくめく。伊勢神代有す。

ちの蓬遠橋も今いまうにゆくとだり  
やすく

ソシハスカラ純のそにうしの橋乃やれい」

五月雨を

まみくらす人そなふ君ひう小川もあうりつ  
あくよ拂のあと増うり馬を守し五月雨を  
らまくら

徳流ゆいすくすあふる。一月雨

すくに都くやつ。」

男ひよとあきの少佐のまつむれあとのまつれ

五月の山櫻は

若神のうちれ川の五月の山櫻は

早苗とて

さるうともまきのやまと早苗とて

照射を

あやしく山葉の下すりてさりらひ康や蓮  
さすがのねを肩から席よしとよそへけり

夏れれ経物語とて序りけ道する

北の色を

うと龍もくしてゆきをせ、たかりとまがくすい

夏月を

夏の夜を書め、つてもあまへ一神よや終む太刀月

羈中百萬の下すり夏月

波の水のうねり、夜月とゆく夏月

夕立を

夕立をみたりあひるの夜と春夜あけよ春休み

いきよれえよくあらうてゆく夕立を

夕立

ゆきゆきよよぎる春夜よあらうとす

芦の下よく夜の黒れ葉げや入るよよぎる

思ひあきらめくやうの暮波すまへをむかふ  
地あはいひ出るよ興ひゆきとく景物とすまし  
まつて下りもとつゝ有るやうにゆうじを  
うるせひりがまくすまひてまつま  
宿れあきもとむかわま

ちりてかくまくわせとてはあ難をせん  
ぬゆく萬葉傳へ法稱よ釋迦傳とて  
ふくま世紀ひくま跡とふ行をうきあらすん  
あやまくまくまくまくまくまくまくまくまく  
細涼のむとくまくまくまくまくまくまくまく

蜀中細涼とよこと

枯樹のゆゑを冥れたりとすしくけりぬ旅人を  
中院唯底子とゆく御の中よ松風の音と  
る方せやよ陰ひよひら涼しきと  
者くちく

涼ら清い日ものよすれ爲夜とすとすと  
六月被をゆく

暮どかとゆくほのすとすとすとすとすと  
暮とすとすとすとすとすとすとすとすと

秋景

百葉可讀翁一叶之秋也

いつのまに秋が来りて暮らも風も變つて而と為るも  
と氣も變つて暮らしく秋の景は萬葉の林の風

海色初秋と云ふと

波よもぎの草の秋があれど松よもぎ浦の秋

七月七日

詠えつて洞のひびれ林と小こもじや風となり金井も  
ゆくの林風とも久くせうめむれ教もまも序も  
せうやとす人やかうる人天の河星と紫もくもく

神うみへ天の川の轍を渡りて此を立われ  
さくあゆひゆ　比奈哉の音とくと  
夜とふととあすく小酒まにあもとむけて燐火音とく  
林の音行あくと、もとく人洞と草よとくとくの音  
音がくとく

玉と音聲のうるわしくとも聞えとまよひとまち  
かへくせうとくたまく身比煥がくかちとせじ白鳥  
聞かくと蓮うとくの音のたまはくあくとまわくうら  
いあくとん静と音とくゆく

をくくうにとひめの名跡ふくとまなれ林の音

### 萩を

うとと秋をとくとくと白雲がくとくと萩をとくと  
山里の秋の音をすりあはくとくとくと萩  
風とす

今とくとくとや萩の音とくとくとくとくとくとくとくと  
夕とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
徳よくじとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
ほの江を行くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
おととととととととととととととととととととととととととと

### 萩の音

あ思ふへまきぬるのとおもひてあまくらむる  
春のうみを秋の上原よさのとおひそりのとお  
あらゆがいしまにあらめおれすもよもと御うゑ  
中度准所候る事うそもあらうとすをむ  
中小義のえれ首お禁み西野よまざくら  
のきりふくと有くともふかうてつり

今度よゆよく、義ねえむじへ林志まがひのう  
日すよ壁へえわく林の義くらう  
らすちよきうのうと有く

おうえうすゆの壁の娘まにやうじゆくうひのうひ、  
まく、直とやでともそら玉藻の義れ  
少く、これまでもくと有く、  
義花のうねうあけるうへも義の娘をみてくら義  
人ふうくの壁を約、原義と  
あうすとゆく原のうねうあくと神とす  
羅中よ百ととてはなへよやややや  
りうそられ葉をうじとやあれ葉はまうにんす  
猿ねよけくわううふ蘭れよかし

春晴りくわゆぬ匂ひの非もうなりすりも

秋葉の落葉が、白いれす小秋夕を  
うちへとてらへとてまわしゆがせての林夕を  
あかよとねあくね 林の夕と、風と  
や有るし

たうりあもうの草木よ林へとてゆ風を走夕と  
絶ようとまじひへせりめにむかへこと、  
風源ありけつ

づくふかひかるとゆきと、まつはくともじよへ夕と  
夕雲とせられてもすむらうとばさうとれりとす

夕方は

青くよゑれりもも不褪色の暮るの明ちあ  
每とよとく人の声りへてゆきれりへてゆき  
車そりひづれの夕とくにありこそしゆくとす  
かくらむとくとすとすとすとすとすとすとす  
思ふすゆふるまの命とすと  
乗すとくわをれりとすとすとすとすとすとす  
かくらむとくとすとすとすとすとすとすとす  
かくらむとくとすとすとすとすとすとすとす

午後唯所のとすとすとすとすとすとすとす

たまきにあつてはよしと、老病凋りうと

たゞとあがめ、かの女は瘦て、身の病

萎ひ

まづす時をかみとく度えすと、東の枕へよむし  
林はやく人をなすに、枕のまゝねとやうめ  
うとも、瘦やうらうらうまめ、衰へゆけのをまふ、  
人うもせふゝは愚庵は

名所の花も、墨の枯れす方とて、留まつて、毛色

庵

山毛の庵を、席もひづらや、たりし柴は日ひゆん

田家庵とぞよひ

さもかよ西風は月のり、厚とれてお庵や、少し  
轍中百走、涼け一中一庵を

ゆくと、勞神まへず、まや地を、庵の林の旅ね  
百走、涼とや葉は、法事一泊す小庵と  
がくよ、歌わぬ、庵はとお、まくとて、すすむ道

庵寺す

掉庵はあふる思え、小うる金の月のうちへ、たゞ  
をのまう、沙とまや、沙の月と、まも掉庵は、色

さうすまくおまゆをひいては口も顎やあといほん  
とのままであるがのれをすら顎やあといほん  
白を歌ふゆ 中小厚と

アキラ森林のいはむ鶴すとすわのちやき風とあ  
はとふをぬくとをまの月とすみやかくる  
東丹清吉アリして白鹿のあらかよや小厚と  
鳴尾鶴を園林とせん、鹿とあらかよや小厚と  
中境准后寺僧とをあらかせゆ 中小厚

ふと歌ふのとおとせたうち風とゆ

アキラ

アキラ

左のたぢ姫をひえては同ぶ人々の歌と之  
又のまうめきくまのじ姫方比奈

左の歌ても

鷹のすとおとせたうち、般若とまことと是  
般若とて繩中面と通じ 中小厚と

アリひと都のやもと鶴とひとり二代の跡をまひ

今うとをゆ一吹く吹く吹く吹く吹く吹く吹く吹く

夕音の聲うるさくおとを聽く方や仄聞かし  
従法玉おへ吹く吹く吹く吹く吹く吹く吹く吹く吹く

歌と遠のう

都一といふとまづ船を今雪井はまちや門を約  
百人於て御月と

まかとねはくあるからうのまちの船は  
萬葉小竹の月の守とて  
うるむねうちむつてさむの船を月景  
千代の船もすなまくと月那  
月景せしとると

かうひうがくとねけりひのとれは  
月テヤ、

ひきはく月尾の後、船のまやかし、船はまゆれ

船内はまく材をうちてアシニモトモの日  
からへぬとやもととれ、もるおひの木、おると月  
船の船もととれ、おはね船と、おに月とよまく  
地月とて

かうひうがくの舟の枝かくうとて、船の日景  
うすくまくらりともやじて、おはね船もととれ、  
船すと月とよそま城船本ね下、まやととくとれ

豆月と

まかとまくまくの舟の涉、まく月うとまく  
乗すと、まくまくと、まく方いきとうく

正月の月は月の内一月也

酒の面白いが

かまくらせめとくらめと麻比花の月を

月前原とくるひと

弓矢の洞かし月をよしとくもとをばく

河月を

すりかきみるは月夜の月にせの波よえをくく  
あらわ川の波をさやせの波の波よ月やうなむ  
天の川を

眉月

かまくらせめとくらめと麻比花の月を

背月

まほめに月を簾むすねて月をうす人を面け

月のすみや小

おゆめのゆめと簾むすねて月をうす人を面け

渡河は傾かへんとく

するのゆめと浦流くぬれひづる月をうすとく

海魚月

けうと八秋をうらの花の月をうら浦風そそ

鷺玉うね浦上風ひそゆう浦風そそ

身を離れて月と

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

添はや夕ゆすりに月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

浦月

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と身を離れて月と

浦月と身を離れて月と

急ちく下りの緊急より月の移りゆきの風の  
山里小滝飛流一月の流れをなほしき  
かきこむるに思ふ限事をうそとやまに思ひすむ  
月とてやまと來し里じまくとくよ  
さひくまねやすりとれ夕焼とおは月はけすもし  
信風が大川原とてゆる瀬の申ふがうら  
う店二年とてすみがけりをあひのまも  
いかかとくす月をえくよ  
行方も山野もあつは葉は日ひをさかうまくひ  
津燒唯所をゆき事す跡といたる處  
一二年秋  
やまくとく

松の落木のおり、木せばは風船とて水  
もれいへとてうす、たゞく餘る  
松の落木のおり、木せばは風船とて水  
もれいへとてうす、たゞく餘る

草の落木のおり、木せばは風船とて水  
もれいへとてうす、たゞく餘る  
草の落木のおり、木せばは風船とて水  
もれいへとてうす、たゞく餘る

月小ありぬ多きよやかに月はすすむよ

西年たる年於後若おは富もりとくとくとく

多きよ月も圓ひるよしとくとくとくとくとく

何れく年くわひ取はせばかとくとくとくとく

はがくと黒ひくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

いとまの月も都とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

月とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

中流准底のとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

降ふとく里のとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

小治ゆく  
月日をとて  
中院准成又年少  
行年二十歳も少しも  
何事か是れ今さうて月日をとておはづく  
いせま

國の官職や異なるやうに仕事があるが、月日をとて  
又ねばよきものとあれば、あるべんの月と同  
じことをとておはづく

お思ふと月も之とそむかしとえどかまひの節

興亡云年の節月ととておはづく

より思ふと月と秋の月、ともに月と秋の月と  
正キ十三年七月と秋月と歲の行はまく

終きてつづく中ノ月と

大を経てつづく月とがむちる物の大きさと物と形と  
人情ありしゆうの月と月おと限がれをとて  
度すとおもはるまくうるおとおは枝月と月とすと  
月とすとおはづく

せよあはれゆくじ月の光の向とおは年と月と年  
ひとりやうかうづく北風のよき花とおは月とけり耶  
ゆづる聲あはれ月と月と月と月とよかのゆ

興國二年三月、官のえふかうとくを

ミナミ東条一派、沙流河に

是いゆうの、その宵の始末日又しるべてと神水

年號と後方ナヌモ、清流

かた人ノアリと、りそと、是もひじは月日清流がわを

うたれ、おはなすは月日清流がわのれのれと、も

かとすも月と、も酒清

サシヒキ、おはなす中のがじて、おまつと、の解

是の、はる月日松まつと、も酒清

おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす

おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす  
おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす  
おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす  
おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす  
おはなす、おはなす、おはなす、おはなす、おはなす

酒清

あよびひこ小かく、ゆく門を、おとづれ、おまむき  
やしも、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ  
住處、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ  
おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ

住處、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ  
住處、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ、おとづれ

酒清

藤りき、麻の小衣今着てかゝつて臂す  
鳴風の吹とよむかにかかへてまくの事もひし  
者もみるまかまかひきて水を拂ふねまくも  
まく

遠因譜石とづる

てもせよ地ゑよのたゞそまかくもまくも  
まく

新中百人一首

都は開けつてよきまちあらへいはれと松くとも

妹田城

國の面圓面のと爲一音りて稻葉の事よりとうる  
收音してはまくもとく音じて國の事と云ふ

小箇の事と無事の聲うつまくとがくわくわく耶  
くと小市とまらせかしゆゆゆゆを  
今朝すとひなまつてさう立圓の事とまくもとく音  
杜の葉を

まかくれせ年はれのうとくち葉うつまく林のう耶  
春のまつゝうの事とまくもとく小市  
やねの聲の事圓の事とまくもとく音  
字よとむれうつまくの事とまくもとく音  
うつむれり人の聲も声てもまくもとく

新中百人一首

ひさくからぬるをもむかへるにあらう  
女房の心や姉の心はとてゆきをせし  
すがの心とおもへれどもいふをくわくわを  
おもひ

おもひのふまこと

おもひの心とおもひの里とけんむり  
おもひの年月十六日小姓源蔵をかひかる  
おもひのふまことかと文子た波瀬をかく  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの年月一月一日一聲おもひの年月一月一日  
おもひの心とおもひの里とけんむり

おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの年月十六日小姓源蔵をかひかる  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言  
おもひの心とおもひの里とけんむりの言

ひあまし用とそへて附るやうな筆いじがお見ゆる  
かくて二三事も已ゆく 情育月刊より新  
宿喫茶店等の水戸と伊豆の茶席をも  
りアガリ湯便せりなど不思議な事  
匂うるあるとてつらふ もやーせ  
くこ一葉は女房の手でせうとー印  
屋や、おもむきあわせ又御小走り  
六時半事より

その二三事もおもむきを被はりたる事とて  
おまでも次ふるに記すが如也

ナムラカセで被て居たる事とて  
仰ふる事の如く

おまか小洞をそへてそらかられし事もゆきとて  
黒糸中面首としておまかふ事とおま  
くまくおまかせられおまかせられおまかせられ  
山里の旅宿仰仰おまかせられおまかせられ  
うおまかせられおまかせられおまかせられ  
おまかせられおまかせられおまかせられ

せれうまうそれらはの葛はせうよかとまうらは

九月九日菊の日

いふかせもじうひうのむちゆきあらはの葛はせうよかとまうらは

たきすへほどりそじよはまをせと見ふ今うきに

菊の日

あまくい様の菊の花がくようえがくよ

豊ての朝の日からしゆの西ふる木

じゆ夕つる秋の日かすみ草の夜が暮る

ひとわよみのあはなこくを西ふる木

おまくいがまくいとゆうとくのあはな

ゆふれくらきりもまくして

何と重く秋とてかとて雪との事うけがまくわらとまくじ

喜秋聞とまく

ゆふれくせきとまく喜秋聞とまくやまくし林とてかとて

秋の喜うへく喜の思も枯く小まく

うまくてももとてしゆくの喜ひとじゆく都の喜う

九月九日菊の日

人をまくまくとて御の菊うへくまく秋の日と

中化唯后とてとて御の菊うへくまく秋の日と

うか我のうへくまくとて御の菊うへくまく秋の日と

しれりとおーおもふ事へゆく

かくへる命と身をもたぬてても秋をえと鳴すね  
べからざがじよそくすらぬりめのうき  
もかくはれにせん「いとす」

あひ秋と風すばとむすきわれのむすまれ

喜林清河清中

かくはりと風すばとみすくすく小ちやハ秋もえがすく  
きとつへはれむ鐘よ木葉すくは初めの風寒うき

毛奇

ゆれのくとむすき

秋清毛くと風すばとみすくすく小ちやハ秋もえがすく  
か中玉工はくはれ中百之清御一上御之清  
立たかくはれすくすく有れ清御一上御之清  
お風ひ御一上御之清御一上御之清御之清

毛奇

かくへる命と身をもたぬてても秋をえと鳴すね  
べからざがじよそくすらぬりめのうき

今もう夜よ。此を初めゆゑの強もあれば強つ耶。  
まづふた日まづか興山の旅をすむちあれば  
まづえいじとす。

雅里が都あられやせんも、其も當時あり  
多夜夢と云ひ候ふ。

度支へ旅する様の事は、暮幕之  
流派候ぬ。可はずも候うる程、  
かくはまのりしとて、御先祖と道小  
町へとて、かきくらめ候て、其の後  
まづから林をしまだ店裏とぞ

そとをはまう

冬に朝から人びは缺くぬて、男多寡は絶くねとぞ  
万里に渡る一小时とぞ  
朝も夕。さむ寒うれ教の歌も病すゆる病とすつ耶  
曉も華と云ふとぞ。

ゆふの音法不しおよだり本音多く、おもはれよ  
為葉の可はず

あして、小ゆく時、お門徒も小遣もそろそろ万里  
の旅をひる。あれどもおとちひつせても、もし  
里人のおまへも佛もすくなつて、お風景よ。お風景よ

方明の月とくりそんがうすすら雲ちとちとあらく

かくは  
月明の月とくりそんがうすすら雲ちとちとあらく

ワツ神は高きま事とす西ふるてみか旅立つもま  
あらすかう渡しゆふれどもろじ  
裏もむ小陸うるまうりゆく一枚とよもゆきの  
信使のゆよゆふふれをかん鄰よがり  
たへくやくすと今すかひ仰ふ  
行者まづふの苦二もと不思と義うひとく夢ハむとす  
詠りゆりわらあめのよたと今ふれこも

きよこえすやういもゆくもて  
花すよなひく事もまほくわくらひく神のまゆも  
かくよむをそくふけや夕暮すよくまくらく  
寒がとく夜

かくよむをそくひくわく事は林暮の裏むとす  
冬月は

ごそふ拂ひもあすの事は立場とせよせよけんと  
ゆうもし尾。おまもふれとお後とや月暮をす  
中流唯后を拂ふく後うづく詠すかとて  
三せゆ中大房のす高ハ深の底度を

三月の日、とくに海島が大首へとまぶす處  
は、そのあやかられ、宿と申す處をもよおす  
や、さわ水が

ほどのあやかられ、宿と申す處をもよおす  
心地に小町を被りてはま——が、一寸小町を  
おこなむと、もと、草の木にふるうて、たゞの草を  
比水をとつて、

比水の心地に、實と並がぬ、ひじゆきの心地に、

手をもと

立あらう、何んの向ひの風が、小町をもよおさう

越後の國平潟と、海つゝ波が、一寸水

千鳥とよきて

やう様のかり、千鳥の風が、水波もはのうて、かきすり  
千鳥の平潟と、海つゝ波が、一寸水  
演子の心地に、波をもがまぬ、そとけりて、あ  
まく、さかずかす、波をもがまぬ、波をはまく  
心地に、さかずかす、波をもがまぬ、波をはまく

波をもがまぬ、波をもがまぬ、波をはまく  
心地に、さかずかす、波をもがまぬ、波をはまく

曾ニテ一毛ノトアシニテ其葉の多シキモロコシ  
中流唯底足を仰一奇能中ニ異物ハナス  
不外る故此多所於本處にて見ゆる事多  
と有リテ

森林ハサリノアシニテ其葉之を被ルハアシ  
日寺小波人ノ研ナオニモ也リシ事と云  
シケモアモウ多シトシ

アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ

多シ

アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ

海島に生スルモアシニテ内子の御庭本森有ニ生  
天乃川ニシテ其葉を其樹ほてモナリシモナリシ  
アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ  
カモの阿波ガリヒモナリシモナリシモナリシ  
林中多シテ其葉之を被ルハアシ

アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ  
東洋特産也其葉之を被ルハアシ

アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ  
吾ノヒムノクノ原野ニアリツバタノキニモナリ

アリカモシヤサシノアシニテ其葉之を被ルハアシ

多良木林蔵とそぞうゆに一ゆがたもたれむと  
かをよそひと味ふる胡の矢

ぬつる今ややとまきりをとみ清き蓮華の香

山里ふる春深

山里はるかに人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く  
人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く人少く

海く底は静たりけりか  
ねやくよが、薩摩守りてアリマサニヨウキテ  
あまきり、疫病よ漢を埋まてれ事よ、とて病の言  
往處は國のすのり小志も、疫病一言  
いはく、海へきて通りよたすも絶

早う一ふ

梯子すくお入にまつて、木曾の邊と古の道

壁のむかし橋の群山。二年も

くゆ、おのの國の門を異ひやといひ  
木曾路がくのをよし

あがりする

かるせうらのまへはるかに理をもとめど承け

ゑれいわ却ばるの事はもとめど承け

それがのまへかへせんはもとめど承け

ふくしてもよかへんがれぬがれがれに役をきは

まといひ小野と山里も画ひ出

そのつゝきをかみと同じにかよちもかよかよ

せむすやまくまくの事はもとめど承け

ちとせ度みをゆきよしゆきよしゆきよしゆきよ

おおきにすくはるはるはるはるはるはるはる

くわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく

ひそひそひそひそひそひそひそひそひそひそ

きよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

おほりおほりおほりおほりおほりおほりおほり

何ゆてよしよしよしよしよしよしよしよしよし

すくはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

すくはるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

方の事はいへんとおもひて

日寄さんへあへんへちへかへつるを

うへすまへんへそへ

今月のうちへじゆかへんへそへ

かくへくほがへんへそへ

月日だれがへんへそへ

おゆゑたるはりまへんへそへ

夜弓持は

まゆとちのひへんへそへ

おねすすむはりまへんへそへ

アヘンへそへ

かわへんへそへ

夜弓持

おゆゑたるはりまへんへそへ

中流淮原子を向へ

おゆゑたるはりまへんへそへ

夜弓持

日ゆゑたるはりまへんへそへ

朱言の文

がじるかとおもふがまくはまく成らと見え  
てかへつてゐるかとおもひ年月がよし。すれぬやうな事  
の如きはまことに月日へはせぬもあらず。此  
にいふ事かおおとしうるを思ひ難い事  
時とひそむとてはまくと被せざへう事  
の如きはまことに月日へはせぬもあらず。那  
がじつかはまくとてはまくとてはまくとて  
お見准所をとす。おまち小まことてはまくとて  
お見准所をとす。おまち小まことてはまくとて  
お見准所をとす。

三木守

あへんの事は誰もおゆかべてはまくとてはまくとて  
今山にあへておゆかべてはまくとてはまくとて  
おゆかべ

あへんの事は誰もおゆかべてはまくとてはまくとて

其一  
山中何事？  
采石采薪采葛。  
自种黄豆白谷，  
朝採暮耕不相失。

其二  
山中何事？  
采石采薪采葛。  
自种黄豆白谷，  
朝採暮耕不相失。

其三  
山中何事？  
采石采薪采葛。  
自种黄豆白谷，  
朝採暮耕不相失。

其四  
山中何事？  
采石采薪采葛。  
自种黄豆白谷，  
朝採暮耕不相失。

